

初めまして。時事通信経済部の次長です、部長ではありません。加藤と申します。ご紹介にあった通り、私は 2002 年 8 月から 4 年間、スイスのジュネーブで特派員として取材活動を行いました。その時の体験を元に書いたのが、平凡社新書から昨年 11 月に出版させていただいた「イタリアは素晴らしい、ただし仕事さえしなければ」という名前の本です。

当社はイタリアに支局が無くてジュネーブでイタリアをカバーしておりまして、そこでかなり仕事、またはプライベートでスイスとイタリアとを往復する機会がありました。スイスと比較をしながらイタリアについて語ったというのが本の内容です。

最初にお断わりしたいのですけれども、この題名は私がつけたのではなく、出版社、特に営業サイドからできるだけインパクトあるものにしたいという強い希望があり、長い変な題名になってしまいました。しかし読んでいただければわかると思いますが、イタリアの欠点だけではなく長所もきちんと書いたつもりです。しかし一方、イタリアで仕事した場合はどうしてもひどい目に遭ったことが多いので、本の中で力点が次第に移っていったのは否定できません。

具体的な内容としましては、2005 年 4 月ローマ法王の死去、2006 年 2 月トリノオリンピック、2006 年 4 月前回の総選挙についての話題です。この中で今回のテーマに合う話としては、トリノ五輪の体験だと思えます。イタリアの皆さんにとって大成功の五輪だと理解されていると思えますが、外国から取材で訪れた我々報道陣にとってはあまり印象の良い五輪とは、はっきり言って言えませんでした。その原因を探っていくと、イタリアの組織の問題点が明らかになってくると思えます。

最初にびっくりしたのが、ボランティアの問題でした。とにかく我々報道陣はイタリア語ができる者が少ない、これは問題なのですが、言葉も事情もよくわからないでうろろうとしている訳なのですけれども、その報道陣に見向きもせず自分たちのおしゃべりに夢中になっている。そしてさらに質問しても本当に自分の狭い担当分野のことは何も知らないし、外国語のことを言いますとイタリア語以外は喋ってくれないと、かなりストレスが溜まる状況に陥ることが数々ありました。しかし後からよく考えてみますと、仕事というものは自分の利益のために働くという現実的なイタリア人気質を考えると、ボランティアというのはイタリア人にふさわしくないような活動に思えてきました。なにしろいくら頑張っても給料が上がる訳でもないし、天国に行ける訳ではないので、それだったらさぼって仲間同士で楽しくやっていた方がいいじゃないかと考えるのが当然だと思います。そういう風に思われました。五輪のボランティアを見ていると、公共機関や大企業、そういったところで自分の貢献がはっきりしない、そういう場所でのイタリア人の働き手の評判の悪さ、勤務態度の悪さは非常に共通するものがあるのかなと思いました。

次に五輪の中で印象に残ったのが、構築した輸送体制が機能していないということです。私は主に山間部の競技を担当して山の中のスキー場、ボブスレー会場を公共バス、

トロックという運営委員会が手配するバスで移動していました。まずどこにどういバスがくるのかさっぱりわからないし、遅れとか間引き運転、始発や最終バスの時間がいきなり切り上げられて、また途中突然路線が変更されるということがよくあり、取材する身としてはかなり辛い思いをしました。

確かに机上の計画はとても素晴らしい。そのまま実行できれば何の問題も無かったはずですが、雪も降らないようなイタリア南部から掻き集めた地理もよくわからない運転手が運転する訳です。そして大会関係者専用バス、選手バス、記者、一般客など、複雑に分かれた路線やバス停をすぐに覚えて間違いなく運転できると考えるということが、そもそも最初から難しいのではないかと皆思っていました。私もかなりひどい目に遭ったのですが、一番ひどいのはある夜ボブスレー会場でその日は大雪が降り、零下10度くらいになっていたと思います。結局二時間くらいバスが出なくて本当に凍死するかと思いました。イタリアでは当初の計画はこの上なく素晴らしくできているのですが、残念ながら実現が不可能なことが多いようで、持続性がない、飽きっぽいところがあって最後までやり通す力に欠けているのではないかと思いました。

以上のような体験から考えますと、海外企業がイタリアに進出しイタリアの人に働いてもらう場合、こういうイタリアの特性を理解した上で工夫することが必要であると思います。具体的かつ短期間で実現可能なわかりやすい目標設定をすることが大切なのではないかと思います。日本とイタリアの友好、イタリアの素晴らしさを世界に広める、ここで頑張れば将来いいことがあるとか、抽象的な目標ではなかなか上手くいかないのではないかと思いました。

イタリアで事業を展開しようと思われる日本企業の方々、目標はそれぞれ違うと思いますが、やはりイタリアに来たからにはイタリアらしい発想やデザインを生み出す想像力を企業文化の中に取り入れたいと思うのが基本的な考え方だと思います。そうは言っても国際厳しくなる中、あまりにも非効率な運営では企業活動は成り立たないと思います。先程の奥山さんのお話にもありましたが、組織的な運営効率の良さと創造性が簡単に両立しないことは企業経営が成り立たないのは承知しております。しかしたまには外国人からの批判を聞いて、改めるべき点は改めていただきたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。